

## 第 15 回美術品梱包輸送技能取得士認定試験の実施について

博物館・美術館に所蔵・展示される貴重な美術品・文化財等の取扱いや、その梱包輸送には、所要の知識・技能が存在する。①こうした知識・技能を継承するインセンティブを関係者に与えること、②より多くの梱包輸送業者の技術水準の向上を図ること、③国公立博物館の競争入札で、安価であるが、技術が未熟な梱包運送業者への落札を回避できるようにすることを意図して設けられたのが、この認定試験である。

日本博物館協会では、平成 24(2012)年から、この認定試験を実施しており、この度、15 回目の認定試験を実施したので、報告する。

### 1 級の認定試験

令和 7(2025)年度の 1 級試験は、夏枯れ時期である 8 月 2 日土曜日に実施した。当日は台風 9 号の上陸が懸念されたが、幸い太平洋上に逸れ、無事実施することができた。今回も、東京国立博物館の平成館で実施した。

1 級は、全ての分野の作品について、所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができ、取扱いの難しい作品の梱包設計が行える水準を想定しており、経験年数 10 年以上と 2 級の保有を受験資格にしている。試験は筆記試験と口頭試問で、両方に合格することが求められる。

受験希望のある 4 社に受験者の枠を振り分け、10 名で試験を実施した。

午前中に行われる筆記試験では、京都醍醐寺蔵の国宝絹本着色五大尊像 5 幅(鎌倉時代)、重要文化財木造五大明王像 5 軀(平安時代)等を東京国立博物館企画展示室まで輸送し、展示会後返却するに際し、その下見と打合せにおいて確認すべき点と、その理由を記述する問題が出題された。試験時間は 90 分、60%が合格の基準である。合格者は今年の半分の 2 人だった。

一昨年「博物館資料取扱いガイドブック」第二次改訂版には、第 19 章として「美術品の梱包輸送設計」を加えた。これは、1 級試験のための自学自習に資することを意図していたが、回答で触れられていない項目があるなど、合格者の成績が以前より低下しており、残念に思っている。

午後の口頭試問では、東京国立博物館で展示されている、伝エジプトテーベ出土の石造の女神像(前 14 世紀)2 軀を、京都文化博物館まで輸送し、展示会後返却するに際し、その下見で確認すべきポイントや、トラブル時の対応について、面接官からの質問に答えて頂いた。1 人 25 分間で、梱包設計の詳細について問うとともに、技術集団を統括し、きちんと所有者等に説明し、事故等に対処することができる人物であるかどうかを見させて頂いた。

面接時間は、出入りを入れると1人30分。受験者10人で5時間かかる。面接させて頂く側としては、これが集中力の保てる限界であり、10人を定員としている。合格者は8人だった。

筆記と口頭の両方に合格して1級を取得したのは、去年の半分で、例年並みの2名となった。

## 2級の認定試験

2級の認定試験は、令和8(2026)年2月21日土曜日と翌22日日曜日、東京国立博物館の平成館と黒田記念館で、午前・午後にわたって実施した。

2級の試験は、全ての分野の作品について、所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができ、現場で作業員の監督ができる水準を想定しており、経験年数5年以上で、3級を保有していることを受験資格にしている。筆記試験、実技試験、面接があり、実技試験は梱包の基礎である陶磁器と、特有の基礎知識・技能を必要とする茶道具を課している。

面接試験に合格して、他の試験で落ちて、再受験する者については、面接試験を免除している。コロナ禍前と同じ60人の定員で募集したが、申込者は45人に留まったため、1日目は2班編成、2日目は3班編成で実施した。うち面接免除者は20人に上った。

2級の認定試験は、東京国立博物館平成館での実技試験から始まる。

実技試験の際のチェックポイントは、受験者の研鑽に資するため、博物館協会のホームページで公表している。ただし、合否の判定は、このリストにある項目の得点や減点によるのではなく、審査員の目を見て「この受験者に作品を任せられるかどうか」を基準にしている。なお、審査員は、東京国立博物館ほか、首都圏の博物館・美術館の学芸員にお願いしている。

実技試験の待機場所には、前回に引き続き、平成館の大講堂を使用させて頂いた。

茶道具の実技は、箱に収まっている茶碗を取り出し、コンディションをチェックして、必要があれば内梱包して、箱に戻す作業を求めた。前回から、3人一組で受験の方式を採っている。今回は基礎の身に付いている受験者が多く、45人の受験者中、不合格者は4人と前回の8人の半数、コメント付きの合格者が11人(前回18人)だった。作業が速やかで、仕上がりも美しい者に与えられる二重丸は、該当者が2人あった(前回該当なし)。

陶磁器の実技は、綿布団を作成して、内梱包を行うことを求めた。今回は、助手を付けて9人一組で実施した。8人が不合格(前回事)、コメント付きの合格が13人(前回14人)、二重丸は4人(前回事)と、ほぼ昨年と同様だった。

午後は、黒田記念館で筆記試験、講習、面接を実施した。

筆記試験は、博物館協会編集の「博物館資料取扱いガイドブック」から出題する。博物館資料の取扱いや梱包・輸送、保存について多肢選択式で回答を求めるが、該当する選択肢がなく、「なし」と答える「ゼロ回答」の問題も含まれる。考古から、陶磁器、漆芸、巻物、甲冑、自然史資料まで広範な作品等をカバーしていることもあり、かなり「ガイドブック」を読み込む必要があるが、十分読み込めば回答できる問題である。回答時間は50分で、32問。65%の正解が合格の基準である。従来、合格者の多くは満点に近かったが、今回はギリギリ合格の受験者が散見され、12名の不合格者が出た(前回14人)。

講習は、主として実技試験の振り返りを行った。茶道具は茶道具の審査員を務めている試験委員が行い、陶磁器は3級の実技審査中なので、試験委員の一人が予め実技試験を見ておいて実施した。

講習の後の面接試験は、コミュニケーション能力と指導能力の確認を主目的として実施している。今回は、1人不合格者があった。

実技・筆記それぞれの不合格者数は前回と大きな差はなかったが、一方で合格・他方で不合格という受験者がいて、所要の試験全てに合格し、2級の認定試験に合格した者は、受験者45名中25名に留まった。合格率は55.6%で、前回の62.0%から6.4ポイント、前々回の70.7%からは15.1ポイント下回ることになった。

### 3級の認定試験

3級の認定試験は、2級の認定試験と同日、2月21日土曜日、翌22日日曜日に東京国立博物館の平成館と黒田記念館で、午前・午後にわたって実施した。

3級は、需要が多く比較的取扱いの容易な陶器、額装作品、掛物などを所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができる水準を想定し、2年以上の経験を要求している。筆記試験と複数の実技試験を受け、全ての試験に合格することが3級認定試験合格の条件となっている。

募集は、コロナ前と同様、定員90人で行ったが、申込みは78人だったので、13人×6班で編成し、各試験日に3班ずつ受験した。うち女子は12人と、初めて2桁を数えた。なお、3級では、筆記試験に合格して実技試験で不合格だった受験者が再受験する場合、筆記試験を免除しているが、今回の筆記試験免除者は20人だった。当日は、欠席が2人あり、受験者数は76人だった。

午前中に実施する筆記試験と講習は、黒田記念館で実施した。筆記試験の第1問は、自習用「ガイドブック」の第1章「美術品の取扱いの基礎知識」の1部を示し、空欄に入る語を選択する問題。第2問は、掛物、卷子等の矢印で示す部分の名称

を、選択肢の中から記号で答えるとともに、読み仮名を記す問題を出題した。今回も 70%の正答を筆記試験合格の基準にした。

例年、知らないと実務に支障の出かねない基礎的な問題を出している。合格者の大半は満点に近い。不合格者は、受験者人中 5 人で、前回の 4 人、前々回の 5 人と人数上は同様であるが、受験者数は逡減しているため、余り楽観できない状況である。

筆記試験に次いで同じ会場で講習を行い、実技試験で実施する額装作品、陶磁器、掛物の模範的な梱包作業をビデオで示し、解説した。この講習で使用するビデオは、有志の委員がこの認定試験に合わせて作成したビデオであり、博物館協会のホームページで公開している。自学自習にご活用願いたい。

午後に実施する実技試験は、2 級と入れ替わって、東京国立博物館の平成館で実施した。各受験者 2 種目受験するが、額装作品については全受験者が受験し、もう一つは、予め振り分けられた班により、掛物か陶磁器のいずれかを受験した。

額装の実技試験は、例年は 15 人、今回は 13 人が同時に受験した。6 号の額装絵画を、国内輸送用に段ボール箱を作成して梱包する。掛物では、例年 7 名、今回は 6 人ずつ受験し、箱から出して壁に掛け、降ろし、内梱包することを求める。陶磁器では、連年は 8 人、今回は 7 人ずつの受験で、与えられた綿布団を使用して内梱包を行うことを求めた。

実技試験の合否の基準は 2 級と同じだが、額装については、作業効率も求められることから、制限時間（額装の場合 40 分）以内に作業が終了できない場合、一律に不合格としている。他の作品分野では、制限時間内に作業が終わらなかった場合、一律には不合格とせず、総合的に判断している。

実技試験の成績は、全員が受験した額装は、不合格者 19 人（前回 27 人）、コメント付き合格 8 人（前回 18 人）、二重丸が 2 人（前回 4 人）で、不合格者数、コメント付き合格者数は、前回から大きく減じた。

半数強が受験した陶磁器は、不合格 7 人（前回 13 人）、コメント付き合格 13 人（前回 8 人）、二重丸は該当なし（前回 2 人）で、不合格は前回からほぼ半減した。他方、掛物は不合格 16 人（前回 13 人）、コメント付き合格 6 人（前回 11 人）、前回該当のなかった二重丸は 6 人と、いわば両極分化し、振り当てられた科目によって、結果が異なることになった。

以上の結果、所要の試験に全て合格し、3 級の認定試験に合格したのは、受験者 76 人中 48 人で、合格率は 63.0%だった。第 1 回の試行の際を除き最も合格率の高かった第 12 回の 77.4%には遠く及ばないが、前々回の 54.1%、前回の 57.6%を上回っており、着実に改善していることを喜んでいる。

今回の認定試験の反省等

連休の谷間の5月7日木曜に、今回の認定試験の反省会を開催した。

本認定試験のオペレーションは、大変複雑なものになっているが、これまで課題の見つかる度に改善してきており、今回も大きな問題は生じなかったと認識している。しかし、受験者の誘導に若干の混乱があったことから、誘導體制について、日博協で検討することになった。

また、茶道具の実技の開始が一部遅れたことから、茶道具実技の時間の割り振りについて検討することになった。

前述の、3級実技の陶磁器と掛物で、不合格者の出方が異なる件については、6年度試験では大きな差異はなかったこともあり、次回の結果を見て対応を検討することになった。

また、制度委員会で、1級の筆記試験に関し、不合格の場合のフィードバックが点数だけであるため、会社として、再挑戦のための指導に窮しているという発言があった。これを受けて、事業者の入らない試験委員会で、時間を取って対応を検討した。その結果、諸般の事情により、フィードバックの内容は変更せず、これに替えて、この筆記試験で何が期待されているかについて会社側に説明し、会社から不合格者に対して解説頂くことに決定した。この場を借りて、関係各社のご協力をお願いしたい。

この数年、2級・3級の受験希望者数が逡減しているが、このことに関しては、次のような議論がある。

2級・3級の認定試験では、できるだけ多くの受験希望者に受験の機会を提供するため、各実技試験は、土日とも、無理なく実施可能な最大回数＝3回ずつ実施してきた。これに、各会場での実技試験が実施可能な最大人数を掛けて、足し合わせて、受け入れ可能な最大受験者数を算定し、これを募集定員として、募集を行ってきた。

しかし、それでも受験希望者数が募集定員を超えていたため、大手数社には予め応募数を割り振って、その範囲で応募して頂き、その他の会社には、状況を説明して、ご協力を賜ってきた。

したがって、大手の数社には、「経験はあるが未受験」という職員のストックが存在したが、それが徐々に減少し、今では、そのストックがなくなりつつある。このため、募集定員に余裕が生じて来ているが、近年では、多数の新たな企業の参加を得て、その穴を埋めてきたという経緯がある。

今回の3級試験では、新規参加の会社を含めて、受験希望者全員を受け入れることができたが、受験希望者数が募集定員を割り込むに至った。

2級試験では、受験者希望数が募集定員を下回ることが既に恒常化しており、今回は、初日の土曜日を2班編成にすることにより、土曜日の朝の準備開始時間

を少し遅らせ、準備時間を少し長く取るとともに、土曜日は、受験者の待ち時間をほとんど解消することができた。

前述のように、2級・3級の実技試験は、1日3回実施のため、受験者はそれぞれ3つのブロックに分かれることになるが、各受験者の受験する実技試験は、2級・3級とも2種類ずつであるため、常時、一つのブロックの受験者は受ける実技試験がなく、待つことになる。こうして生じる待ち時間の削減は、この認定試験の一つの課題であると認識しており、昼食の時間をずらすなど、種々の工夫は行っている。しかし、待ち時間問題の本質的な解決には、実技試験の回数の変更が不可欠である。

このためもあって、募集定員の再検討は、避けて通れない問題であるが、次回については、募集定員は改めず、希望者の数を見て、対応方法を検討することになった。

最後に、反省会の際に必ず出る話題であるが、一昔前は、作品の取扱い・展示については、学芸員こそが専門家であるという認識が広く共有されており、学芸員が梱包輸送事業者を指導して、梱包・輸送・展示が行われるのが通常の間だった。

近年では、その関係が変化し、こうした業務は学芸員の仕事ではないと考え、梱包・輸送、さらには展示の作業まで、落札した梱包輸送業者任せの学芸員が散見される。しかし、事故があった際、責任は学芸員にあることは変わらない。少なくとも、指導するのは学芸員の任務である。

梱包・輸送の知識・技能の習得は、学芸員にとっても必須なのではないかと考える次第である。